# 坂元の宝篋印塔

さかもとのほうきょういんとう

文化財愛護シンボルマーク

| | | | |
|---|---|---|---|
| 名　　称 | 坂元の宝篋印塔 | 所 在 地 | 加古川市野口町坂元 508 番地の 2 |
| 別　　称 | 伝和泉式部の塔、和泉式部供養塔 | 所有者等 | 坂元町内会 |
| 数　　量 | １基 | 指　　定 | 兵庫県指定文化財 |
| 寸　　法 | 総高 249.5cm（基壇 - 相輪） | 指定分類 | 建造物 |
| | 塔高 228.0cm（基礎 - 相輪） | 指定名称 | 石造宝篋印塔 |
| 材　　質 | 石造　花崗岩製 | 指定年月日 | 昭和 50（1975）年３月 18 日 |
| 時　　代 | 南北朝時代～室町時代初期 14 世紀 | | |

坂元の宝篋印塔

野口町坂元を通る旧西国街道沿いに、石柵に囲われた花崗岩製の宝篋印塔が南西に向いて建っています。全体の様式や各部の手法からみて南北朝時代から室町時代初期の造立と考えられているこの塔は、江戸時代の地誌『播磨鑑』や、江戸時代後期の旅行案内である『播州名所巡覧圖絵』に「和泉式部の塔」として紹介され、古くから街道を歩く人々に親しまれてきました。

宝篋印塔とは、方形の基礎、塔身、笠、相輪などからなる仏塔の一種で、笠の四隅に隅飾を立てています。宝篋印塔という名は、内部に宝篋印陀羅尼の経文を納めたことに由来するといわれますが、主に供養塔や墓塔として造立されました。

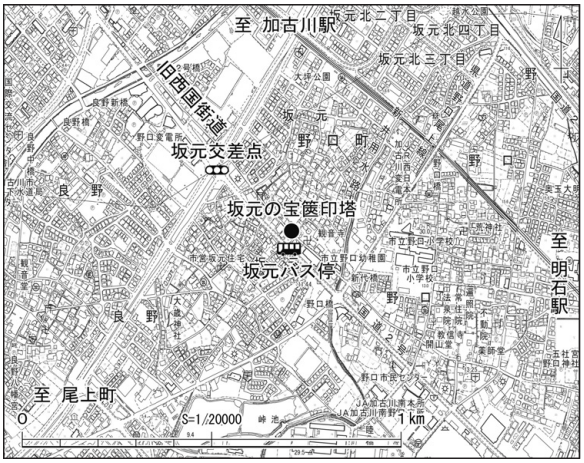
この塔は、四ツ石上に据えられた基壇の上に建っており、基壇の上段の各面に中央複弁三葉、四隅に複弁一葉の反花座を設けています。

基礎は、上部に二段の段形をつくり付け、各面に輪郭を巻き格狭間を表しています。格狭間の中は、東面に珍しい意匠の一茎蓮を、ほか三面に典型的な近江式文様である開花蓮を刻んでいます。

基礎（一茎蓮）拓本

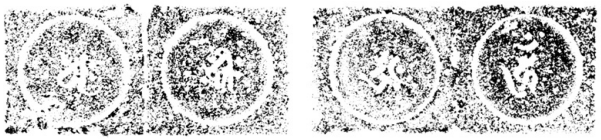
基礎（開花蓮）拓本

塔身は、各面に蓮華座を持たない月輪を彫り沈め、中に小さめの金剛界四仏の種子を刻んでいます。通常の方角では東面がウーン、南面がタラーク、西面がキリーク、北面がアクになりますが、現在は正面（南面）にウーンがあり、本来の配置から時計回りに90度回転した状態で置かれています。




笠は、下二段上六段の定形式で、隅飾は二弧の輪郭を巻き、各面に月輪を薄肉彫りした中に胎蔵界大日の種子 𑖀 （ア）を刻んでいます。

相輪は、覆鉢・下の請花・九輪・上の請花・宝珠が一石でつくられていますが、現在は折れた上端部が接合されています。



𑖀アク（不空成就如来）　𑖁キリーク（阿弥陀如来）　𑖂タラーク（宝生如来）　𑖃ウーン（阿閦如来）

塔身 拓本

近年、塔の傾きが大きくなっていたため、令和３（2021）年６月に塔の積直し工事が行われました。その際、基壇の下で江戸時代の陶磁器片や現代の硬貨が見つかり、近世から現代にかけても何度か塔の積直しが行われていたことがわかりました。

七尺五寸塔であるこの塔は、市内の宝篋印塔の中で最も大きなもので、全体の調和がとれた姿も美しく、加古川地域を代表する石造文化財といえます。

［各部寸法］　相輪　…高 89.0cm
笠　…高 50.5cm、幅 64.0cm
塔身　…高 34.0cm、幅 35.5cm
基礎　…高 54.5cm、幅 69.0cm
基壇　…高 21.5cm、幅 104.0cm

（拓本／『加古川市史 第７巻』より転載、文・写真・採寸／古林）

●参考文献
『加古川市史 第７巻』加古川市（1985 年）
『兵庫県文化財事典』西日本文化財保護協会（1985 年）
『伝説 和泉式部』後藤益太郎（1990 年）
『日本石造物辞典』日本石造物辞典編集委員会（2012 年）

●キーワード
石造物　花崗岩　宝篋印塔　金剛界四仏　種子
胎蔵界大日如来　伝和泉式部の塔

●所在地／兵庫県加古川市野口町坂元 508 番地の２

●交　通／ＪＲ加古川駅から南東へ徒歩 23 分
ＪＲ加古川駅南口発 神姫バス「坂元」バス停から北へ徒歩１分

編集・発行：加古川市教育委員会　文化財調査研究センター
令和４年３月 31 日（2022.03.31／1000）